

論文内容要旨

論文題名：看護師の夜勤明け超過勤務の実態と削減対策の効果評価

専攻領域名：昭和大学大学院保健医療学研究科保健医療学専攻
地域・在宅ケア・マネジメントと医療施設ケア領域

氏名：古川 浩次

内容要旨

【目的】2016年6月～2017年5月の対象病棟全体の夜勤明け超過勤務時間数は合計で416時間であった。超過勤務の1番多い月は10月の54.8時間、少ない月は5月で18.3時間、月の平均は35時間であった。夜勤者3人共に毎日1時間程度の超過勤務が常態化している状態であった。そのため、夜勤明け超過勤務の削減対策として活用したタイムスケジュール表とタイムスケジュール表に基づくワークシート2つのツールの効果を明らかにし、看護師の働き方を考えるための知見を導き出すことを目的とした。

【方法】A病院の対象病棟で夜勤業務を行った看護師22名を対象とし、2017年6月より超過勤務時間総数を活用前後で比較した。自らの働き方の認識については、2つのツール活用前後で実施した計3回の質問用紙より質的帰納法的に分析をした。

【結果】夜勤明け超過勤務時間数は、年間総数416時間に対して90時間へ減少した。超過勤務の1番多い月は活用開始月の6月で16時間、少ない月は5月の5時間、月の平均は7.5時間であった。自らの働き方に関する認識は、活用前【チーム機能不全】、【非効率的な情報共有】、【不明確な業務の管理】、【対応しきれない多重業務】、【常態化した感覚】、活用後2ヶ月【チーム機能の課題】、【情報共有の変化】、【業務分担整理】、【勤務終了時間の意識】、活用後12ヶ月【情報の活用】、【勤務内容の捉え方】というカテゴリーが創出された。

【考察】タイムスケジュール表とタイムスケジュール表に基づくワークシート2つのツールを活用することで、勤務交代時の円滑な業務の引き継ぎと、短時間で情報共有を図れた事が超過勤務時間の削減へつながったのだと考える。更に、目標達成という経験が主体性を育み、看護師自らの働き方へ影響したのだと考える。

【結論】業務をシステム的かつ効率的に遂行することで、限りなく超過勤務時間の削減を可能とすることが分かった。超過勤務が常態化している現状が、職場風土に影響し主体的な行動の妨げと非効率的な働き方となることが分かった。超過勤務は削減できるという自信や達成感が、働き方をより良くしたいという主体的な発想へつながることが分かった。自らが問題を解決していくことで、専門職業人として専門性を追求する働き方へと変化することが分かった。